

3章 「工夫する」

みずみずしい感性により、心が大きく揺り動かされて生まれた発想を自分たちで実現しようと、子どもたちは夢中になって遊びます。3章で紹介する事例は、子どもたちの遊びを支えるために、園全体で子どもの理解を深め、担任保育者だけでは創り出せない環境や、問題解決のヒントとなる保育を「工夫」しています。また、園全体で保育を共有して連携を図ることはもちろん、一緒に活動する仲間、クラスや学年、異年齢の仲間の繋がりを大切にすると共に、家庭や地域の教育力を保育に取り入れる「工夫」をしています。

1. 環境設定の情報を共有する

子どもたちが安全に、安心して使いこなせる教材の工夫、伸び伸びと遊べる環境の確保
シャボン玉遊びや、色水遊びなどを繰り返し楽しむ子どもたちの姿には、不思議を感じたり、もっと面白くしたいと新たな発想をしたりする言動が見られます。そして、自分たちで探究し、試行錯誤を重ねるには、例えば石鹼や草花の色の出し方などを試す状況で、安全に扱え、自由に使える環境の工夫が欠かせません。また、その環境が設定されていることや、遊びに夢中になっている子どもたちのことを、クラスや他の学年の子どもや保育者も共通に理解をして、場や時間を保障する保育が大切です。



事例1では、保育者は色水遊びに夢中になる3歳児に注目し、遊びが継続して深まるよう、興味に添った保育を工夫しています。生活の中で知っている漬物作りで色が変化する不思議、水から音がする不思議、匂いがする面白さを感じる体験を、子どもの実態に応じて保育者が一緒に楽しむ場面を作っています。加えて、子どもが自分たちで繰り返し遊び、探究や試行を楽しめる環境の工夫をしています。



2. 子どもの興味や探究が広がるように、園の恒例行事や地域の交流活動を工夫する

心が揺り動かされて体験の広がりにつながる「好奇心や興味の対象への出会い」の工夫
園生活が充実するように、多くの園では独自の恒例行事が計画されています。また、地域の施設や教育機関、自然環境などを教育力として保育に取り入れ、日常の園生活ではできない体験を保育に活かす工夫をしています。

事例2では、移動動物園の活動で、子どもたちが羊毛に興味をもったことを見逃さず、教材として出合えるように工夫しています。子どもたちは羊毛を使って遊びながらいろいろな気付きをし、探究を楽しむ体験をします。その後の近隣の保育園との交流では、羊毛と類似する綿と出会い、興味を深めるとともに栽培活動へと広がります。また、園の文化になっている蚕の飼育活動に興味をもち、新たに蚕の命や絹糸に出合う体験の広がりに繋がっています。地域連携や恒例の行事・活動を通し、心を揺り動かされる体験をした子どもたちが、その体験をその後の遊びに活かして、豊かな発想や探究心の深まりに繋がるように、保育者は保育を工夫しています。



3. 課題や問題を解決するために、自分たちでグループやクラスの枠を越えて関わる環境の工夫をする

グループやクラスで夢中になっている活動やその情報を共有し、自分たちの課題や問題の解決のために関わり合い、考え合える保育の工夫

子どもたちは、一緒に遊ぶ友達はもちろん、違う遊びの友達であっても、夢中になっていることや困っていることに関心をもち、考え合ったり情報交換したりします。この時の関わり合いによって、新たな気付きや発想が生まれ、自分たちで問題解決に取り組む体験の深まりに繋がります。日常の保育の場面では、グループやクラス、学年や縦割りなどの子ども同士の伝え合いの場面が大切にされています。

事例3では、5歳児が3クラスの枠を越えて、自分たちで疑問や問題を考え合い、情報を交換し、カエルの飼育を進めています。カエルを飼育するという同じ活動であっても、クラスの実態によって、子どもたちがもつ疑問や課題は違います。その実態を活かし、「子ども同士が伝え合い、考え合うようになる」ことで、カエルへの愛着や好奇心が増し、飼育体験が深まっています。

このように、一人一人の子どもの主体性を大切にし、園の特徴や子どもたちの実態を生かして、「感性や創造性の芽生えを育むための工夫」をする保育は、独自性があり大変貴重な実践です。また、保育の工夫により、子どもたちが体験している「学び」は、今日の教育に求められているものであり、幼児教育においても目指している「主体的・対話的で深い学び」に繋がっています。